



TITLE:

ドイツ社会民主党と財政政策(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

廣田, 司朗

CITATION:

廣田, 司朗. ドイツ社会民主党と財政政策. 京都大学, 1966, 経済学博士

ISSUE DATE:

1966-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212029>

RIGHT:

【 12 】

氏 名	廣 田 司 朗 ひろ た し ろう
学位の種類	経 済 学 博 士
学位記番号	論 経 博 第 10 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ドイツ社会民主党と財政政策

論文調査委員 (主 査)
教 授 島 恭 彦 教 授 出 口 勇 蔵 教 授 山 岡 亮 一

論 文 内 容 の 要 旨

ビスマルク体制下のドイツ帝国財政は、軍事費を中核として、これを支弁する間接税中心の税制をもち、他方でその帝国の税収入より邦国への交付金と、邦国から帝国への分担金とから構成されていた。社会民主党ははじめ間接税批判を中心とするラッサール主義のまわりに一応の統一を保っていたが、その後の軍拡と艦隊建設計画、それに対応する財政税制改革、帝国と邦国との新たな中央集権的關係などの問題に当面して、様々の分裂と分解作用をおこしはじめた。

いま分裂の契機となった主要な財政問題をあげてみるならば、帝国財政が間接税ではなく、直接税を採用した場合には、それに賛成すべきかどうかという問題、軍事費という支出目的から切り離して望ましい租税形態に賛成すべきかどうかという問題、予算全体には原則的に反対しても、望ましい支出目的の予算には個別的に賛成すべきかどうかという問題、軍事費中心の帝国予算には反対しても、非軍事費を中心とする邦国予算には賛成すべきかどうかという問題などである。

以上のような問題に当面して、社会民主党内のマルクス主義正統派は財政税制を階級国家の大衆収奪の手段とみる立場から、財政税制改革よりも、社会変革の法則を重要視した。またいかなる予算に対しても原則的反対の立場を貫き、予算租税斗争を通じて、反帝国主義運動と革命的条件の成熟を促すという立場をとった。これに対して修正派は税制改革を労働者階級の現実的利益を増進する手段、つまり社会改良の手段と考え、「より小なる悪」をえらぶ戦術問題と判断し、個々の財政税制改革をつみあげて社会主義へと前進するという立場をとった。

以上本論文は、ドイツ帝国財政の成立から第一次大戦前夜までの各時期における、財政税制改革、予算問題に対応して社会民主党がいかなる財政政策を提起したかを叙述し、党の思想がラッサール主義、マルクス主義、修正主義へと変遷する過程を明らかにし、最後にマルクス主義と修正主義との財政思想を比較検討することによって、財政学方法論の展開の糸口をつかもうとしたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は第一にビスマルク体制確立期から第一次大戦までのドイツ帝国主義の財政政策の変遷，第二にこれに対応する社会民主党の綱領と財政政策の推移，第三に党の思想の分裂という三本の柱からくみたてられ，その構成はきわめてしっかりしている。またマルクス主義正統派の財政問題に対するいわゆる「関心喪失」の状態から，まさに修正派の財政論がはじまるという過程に焦点をあて，そこに財政学方法論の問題をさぐり出そうとした論者の鋭い問題意識は高く評価してよいと思う。

しかしこの問題意識は，さきにのべた本書の構成，主としてその時代的な制約と，当時のドイツ財政学との関連の省略の故に，充分にはみたされていない。この欠陥は，論者のもつ高い問題意識と，構成を堅固にし，範囲を限定して，研究密度を高くせざるをえない専門論文との間にさけられないものであろう。しかし本論文には次のようないくつかの高く評価すべき点がある。

第一にドイツ社会民主党の財政論に関するわが国唯一の体系的労作であること。同問題については，戦前戦後を通じて二，三のモノグラフがあるだけで，ほとんど未開拓の分野であった。

第二にドイツ社会民主党についてのすぐれた歴史的研究であること。論者は党大会のプロトコール，ノイエ・ツァイト，社会主義月刊誌，その他多くのパンフレット類をたんねんに整理分析している。したがってこの論文は財政学者よりもむしろ歴史家から高く評価されている。（西洋史学，1962，LV I，史学雑誌，72の5，前川貞次郎，入門西洋史学，ミネルヴァ書房）

第三に社会民主主義，とくにその中の修正主義といわれるものの数少ない思想史的研究であること。マルクス主義正統派からの修正派の分裂過程と修正派の本質とは，帝国主義時代の財政政策と社会民主党の思想とを対応させて考察するという論者のすぐれた方法によって，はじめて解明された点が多いと言えよう。また修正主義の財政論に焦点をあてることによって，逆に当時マルクス主義正統派と呼ばれていたグループの財政問題に対する硬直的な態度，いわゆる「関心喪失」の問題について解明の糸口を与えたともいえるのである。

以上の諸点からして，本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。